

古今和歌集1100年 熊本フォーラム

森 正人

今年、古今和歌集が編纂されて1100年、新古今和歌集が編纂されて800年という、大きな節目の年に当たります。古今和歌集は最初の、新古今和歌集は8番目の勅撰和歌集です。勅撰和歌集とは、天皇の命令によって編纂される和歌の詞華集で、醍醐天皇の命により延喜5（905）年に成った古今和歌集から、文安元（1433）年の新統古今和歌集まで、21もの集が編まれています。総称して二十一代集という勅撰和歌集のなかで、文学的な達成度も最も高く、文化史的意義も大きい歌集の編纂の年から数えて1100、800という歳月を刻んで今年に至ったというわけです。

この記念すべき年に当たり、昨年から各地のいくつかの機関や施設で古今和歌集と新古今和歌集にちなむ研究集会や展示などの催しが行われていますし、また計画されていると聞きます。文学関係の雑誌でも特集が組まれています。

こうしたなかで、私たちも「古今和歌集1100年 熊本フォーラム」という催しを企画しました。私たちというのは、熊本市内の大学で日本古典文学の教育と研究にたずさわっている、本学文学

部・教育学部、熊本県立大学文学部、尚絅大学文学部の教員たちです。

催しの趣旨は、古今和歌集とその享受の歴史に関する学術的な整理を行い、古今和歌集が生み出した学芸と文化について知識を広げ、深めるとともに、その成果を大学教育に活かし、平易なかたちで広く市民に提供するところにあります。

主要な催しと日程は次の通りです。

11月4日（金）～6日（日）

貴重資料展（熊本大学附属図書館）

11月4日（金）13時～

和歌の披講に関する解説と実演および学生による研究発表（熊本県立大学）

11月5日（土）

10時30分～

安永蓆子氏による講演（総合女性センター）

13時～

古今和歌集とその享受をめぐるシンポジウム
および狩野琇鵬師による能「井筒」の上演
（総合女性センター）

11月6日（日）13時～

古今集時代の和歌に関する講演（熊本大学附属図書館）



附属図書館の貴重資料展は、本学に寄託されている細川家の永青文庫の古今和歌集とその享受に関する資料を中心に展示します。熊本県立大学で行われる和歌の披講とは、宮中の歌会始の儀式などで行われる和歌を読み上げる作法について、東京聖徳大学の青柳隆志氏と早稲田大学の兼築信行氏の解説で学び、これを実際に体験しようというものです。5日（土）に総合女性センターで講演

してくださる安永氏は「椎の木」を主宰する歌人、「井筒」を舞われる狩野師は喜多流の名手、ともに熊本が宝とすべきお二人です。シンポジウムは熊本県立大学の鈴木元氏が司会を、青柳隆志氏、お茶の水女子大学の浅田徹氏、星美学園短期大学の高野晴代氏が講師を務めます。また、6日(土)の附属図書館での講演は私が行います。

熊本フォーラムはこれだけではありません。10月に県民交流館パレアを主要な会場として、古今集とその享受に関する4回のプレセミナーを行います。講師は鈴木元氏、県立大学の山崎健司氏、本学教育学部の小川幸三氏、尚絅大学の久多美健氏が担当されます。

ここで、古今和歌集と新古今和歌集を記念する催しがすでにいろいろなところでいくつも行われているというのに、なぜことさら熊本でも行う必要があるのかという疑問を持たれる方もありましょう。私たちは、この熊本で行う意味は大きいと考えます。このことを理解していただくには、古今和歌集の享受史を繙かねばなりません。

古今和歌集は、最初の勅撰和歌集として後代の勅撰集や和歌の規範となりました。そればかりでなく、季節感、自然観、恋愛表現など王朝的美意識の基盤となり、その上に文学のみならず、さまざまな芸術が華開きました。やがて、古今和歌集は単なる古典というよりは、^{カノン}聖典としての位置を占め、古今和歌集に関する学問は特定の人にしか伝えることを許さない秘説を生むようになりました。古今伝授と呼ばれます。

その古今和歌集に関する秘説を受け伝え、授けた一人が細川藤孝(号は幽斎、1534-1610年)で、肥後細川家の初祖です。その幽斎が書写した本を含む細川家の蔵書が永青文庫で、本学に寄託されています。つまり、本学附属図書館の図書は古今和歌集の享受史に大きな位置を占めているのです。

古今和歌集は、日本の伝統文化の源泉としてた

しかに大きな役割を果たしましたが、それは一面日本人の発想や感性を呪縛してきたとも言えます。たとえば、明治に入って短歌革新の旗手となった正岡子規は、「貫之は下手な歌よみにて古今集はくだらぬ集にて有之候」(「歌よみに与ふる書」)と酷評

します。これが行き過ぎたものであるとしても、このような激しい否定の言葉を必要とするほど、古今和歌集の権威は高かったということです。とすれば、現代の日本人もまた、古今和歌集的なものの見方や感じ方を知らず知らずのうちに受け継いでいるのではないのでしょうか。

このような意味で、今、熊本で古今和歌集について知ること、その享受の歴史を振り返ってみることは、日本の伝統文化の源流の一つを尋ねることであり、その流れを汲む熊本の文化について知ることであり、そして、現代の私たち自身について省みることにほかなりません。

プレセミナー、図書館の展示、講演、シンポジウムのどれか1つでも結構です、ぜひ足を運んでください。



もり まさと
文学部長・教授
主著：『今昔物語集の生成』
和泉書院 1986
『東アジアの文化構造』
九州大学出版会 1997

【表紙の言葉】

今号の表紙は附属図書館蔵松井文庫「古今和歌集」(箱入)です。